

## 「3万年前の航海」、残る舟の謎 本当に丸木舟？ 国内最古は7500年前

有料記事

2019年8月1日05時00分



台湾から与那国島を目指す丸木舟。黒潮が流れる海を横断できた＝いずれも3万年前の航海徹底再現プロジェクト提供



日本列島に人はどうやって渡ってきたのか。その謎の解明を目指した国立科学博物館による「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」が先月、台湾から与那国島へ丸木舟で渡ることに成功した。ただ、旧石器時代のこの地域に丸木舟があったのか、木の伐採や加工に使った石斧（せきふ）が存在したのかといった確証はまだない。当時の航海をはっきりと描き出すには、さらなる研究が欠かせない。

約200キロ離れた台湾の東海岸を出航してから約45時間。全長7・5メートルの丸木舟「スギメ」が7月9日、黒潮を越えて与那国島の砂浜に到着した。

舟をこいだのはシーカヤックのガイドら男女5人。3万年前の航海を再現するため、夜間航海に必要な航行灯などを除いてコンパスや地図を持たず、太陽や星で方角を探りながら舟を進めた。

方角を完全に失ったり、波が高く海水をかき出し続けられないといけなかったりする時間もあった。2日目の夜は全員が休息したが、与那国島へ向かっていた潮の流れに助けられた。

プロジェクトを率いた国立科学博物館の海部陽介・人類史研究グループ長は、ついに海を渡ったことに「優秀なこぎ手と丸木舟があれば黒潮に流されずに海を渡れることが分かった」と語った。

日本列島に人が暮らし始めた約3万8千年前。アフリカを出た現生人類はアジア大陸から北海道と対馬、沖縄の三つのルートで日本に渡ったらしい。このうち沖縄ルートに当たる琉球列島の島々には3万年前ごろの旧石器時代の遺跡が点在しており、黒潮の流れる海を越える技を身につけた人々がやって来たと考えられている。

どんな方法で海を渡ったのか。現地で調達できる材料で舟をつくったと想定し、2016年につくったのがヒメガマを使った草束（くさたば）舟だった。安定した形にできたものの重くて速度が出ず、与那国島から西表島への実験航海で流され、出発から約8時間後に断念した。

次につくったのは竹筏（たけいかだ）舟。台湾に育つ大きなマチクを材料にした。製作技術が伝わる地元のアミ族の人たちに協力してもらい、17年に台湾で実験航海したが、これも船体が重く速度が出なかった。軽くした2隻目もうまくいかなかった。海部さんは「草と竹は舟でなく漂流物だった」と振り返る。

最後に残ったのが丸木舟だった。しかし、国内の丸木舟は縄文時代の約7500年前が最古とされ、3万年前とは隔たりがある。

ただ、旧石器時代に遠距離の航海技術があったのは確からしい。伊豆半島の約40キロ沖に浮かぶ神津島の黒耀石（こくようせき）が、切れ味の良いナイフや矢じりなどの材料として3万8千年前以降の各地の遺跡から多数出土しているからだ。池谷信之・明治大黒耀石研究センター員は「旧石器時代の舟は世界的にも見つかっていないが、何らかの舟で往復し、黒耀石を運んだとしか考えられない」と話す。

#### ■石斧、復元や作業難航

丸木舟の製作も難題続きだった。縄文時代の舟を超えない性能と規模でつくることになったが、5人が乗るには直径1メートルほどの大木が必要。台湾では適当な木が見つからず、結局、石川県のスギを伐採することになった。

伐採は、国内で3万～3万8千年前ごろの遺跡から出る刃部磨製石斧（じんぶませいせきふ）でされたと想定した。刃の部分を砥石（といし）で研いだ石斧だが、考えた装着方法では木の柄が緩みやすく、早いと100回、もっても5千回で換えないといけなかった。

木をくりぬいて舟にする作業も難航。航海実験に間に合わなくなると心配されたため、作業しやすい工夫を施した。首都大学東京の山田昌久特任教授は「旧石器時代の石斧や作業を復元できておらず、丸木舟をどうつくったのかの解明は途上だ」と話す。

そもそも旧石器時代に、そうした石斧が伐採や木の加工に使われたのかははっきりしない。台湾や琉球列島の大半では出土例もない。早稲田大の長崎潤一教授は「国内の確実な南限は鹿児島県の種子島。徳之島より南では石器自体がほとんど出ていない」と語る。

だが、石斧も舟も、どれか一つでも新たな証拠が見つければ状況は変わる。東京大の佐藤宏之教授は「丸木舟が使われた直接の証拠はないが、状況証拠はかなりそろっている。大事なのは考古学的データの蓄積で、新しい旧石器時代遺跡をどれだけ見つけられるかが課題だ」と話した。（米山正寛）